

緒方良信の彫刻

緒方良信の彫刻作品に見られる基本的な考えは「流れ」である。

しかし、それは単純な「流れるようなフォルム」ではなく、ある対象が動くときに、時間と空間が現す意味の豊かさを凝縮したフォルムとっていい。そこには、ブランクシーやアルプが考えた純粋な彫刻の原型という概念に従いながら、時間と空間の流れの一瞬の記憶を定着した様々なフォルムがある。そして、「流れの中に」「人と流れ」「流れを横切る人」「反流」といった題名の70年代の作品に見られるように、それらの中で作者は、自然と抽象とが相対立する一つの物語を生き生きと表現する。いわば、彼は捕え難い動きが幾何学的構成の内部に結晶するところでフォルムを実現するのである。時間と空間の「流れ」が現す意味の豊かさとはこのことを指すといっている。

素材に対する彼のアプローチは、単純な形態上の遊びが支配するのを避けるために、暴露したり隠したりする二重の姿勢であることが解る。フォルムを外に暴くのは西洋の理念であり内に隠すのが東洋の理念だとすれば、そこでは、フォルムは同語反復的にあらわれて可能な新しい調和を求める探求となるに違いない。この意味で緒方は西洋と東洋の二つの芸術的伝統の間の対話の可能性を探求する人に属する。とくにヨーロッパから見ると、彼の作品における凸面と凹面の間継続の解決は、東洋の道教の象徴をとりいれているとされる。

80年代になると作品のフォルムに変化が現れる。70年代に見られたフォルムの「流れ」は、フォルム自体を構成する要素であったために、時間と空間の凝縮の一瞬にフォルムの固さを呼び起こす危険を残していた。だが、80年代から「流れ」は、フォルムの全体ではなく、一つのフォルムの中で明らかに「水の流れ」の記憶となって現れはじめる。そして、流れる水は無限の彼方に向い、水は水の起源である「しずく」を必ず伴うようになった。当然のことだが、「しずく」は生命の起源を象徴する。「しずく」は水の流れとなって波状形態を示しながら周囲の幾何学的構築体から湧き出る。いつも表面が切り開かれ、傷つけられ、判読できない記号や筆跡によって不透明となった構築体の中で、「しずく」は、時には表面に沿い時には内部を通ってリズムカルに流れ、湧き出し、生命の終りに向かって無限の水紋を作るのである。それは、生々流転が象徴する生命の流れとして宇宙の無限と輪廻の理念をあからさまにしてゆく。80年代の作品の殆どは「水の即興」と題されるのだが、それもまた水の流れと水滴の織りなす一つの事件の、予測できない多様な詩の表現である。

イタリアの評論家ヴィアナ・コンティが緒方良信について述べている中で、「彼の作品は何かはまだ起こるに違いないということを知らされる」といっているが、恐らく「しずく」が暗示する生命の神秘のことをいっているのだろう。

長年イタリアのラ・スペツィアに住み、大理石の町カッラーラで制作、ベルギーの黒大理石をこよなく愛する緒方は、素材と理念の調和を目指す彫刻家の一人として、ヨーロッパ国内で多くの個展を開催、国際彫刻展にも何度か受賞するなど、活躍が大いに注目されている。

北海道立近代美術館館長

井関正昭